
大闇子闇

元爺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大闇子闇

【コード】

N0989C

【作者名】

元爺

【あらすじ】

親父の真実から城を飛び出した。それだけの理由でいるんな人と出合った。最後には・・・

〈序章〉

(誰がこんな町にした)

僕はいつもそう思っていた。親父の背中に守られながら、いつも思っていた。

僕が町へ出かけるたび、僕を見かける人は全員、口をそろえて言う。「あの悪魔が来たぞ」、殺せ」

なんで、なんで殺そうと、なんで僕を殺すのか、あの日までは考えても、答えが解らなかった。

そう、あの日、僕の親父への尊敬が憎しみへと変わった日。

夜遅くに起きた僕、

いつもは迷わない城が寝ぼけていたためか迷ってしまった。

そんな中で、光る一室を見つける。

ただの興味本意で覗いた部屋。

偶然見てしまった親父の真実。それは、町の人たちへの・・・

「恐怖を通り過ぎたら声がでなくなる」

その言葉通りだった。僕は、自分が立っているかも解らない、そんな気分を味わった。

僕は、その場を逃げるように立ち去った。いや、走り去った。

(もう、親父を信じない)

そう心に決めて、真っ暗な城、町を駆け抜けて

(親父を殺せば町の人も、少しは・・・)
それを、心に決めた。

〜決意〜

四つの大国からなる国『クワトロン』

丸を描いた大陸の東南に位置する『イスダン領』

その中心に位置する城下街『イスダンブルク』

昼は街の人たちの楽しさでいっぱいの愉快な街

夜は誰も居ない、そんな雰囲気を漂わす。

この城下町、イスダンブルクの正体を知ってしまった少年が一人、背を向けて歩いている。

それも、北や西ではなく、南へと・・・
まるで自殺をしようとしてるかのよう

イスダンブルクを南に数キロメートル行った所にある岬

断崖絶壁の崖の上、真っ暗闇の空間、

草花が生える地面に少年は腰を落とす。

そのうち、少年の肩は小刻みに動き始める。

泣いてるのだろうか？ 笑ってるのだろうか？

寒いのかは解らない。

この少年の名は「ネグリリス」イスダル」通称ネイ

王族の子供で何不自由なく暮らしていた。

唯一不自由だったのは、街の人の存在だった。

街へと出かけるたび「殺せ」の掛け声

城を抜け出すには違う理由があったのだろうか、

それは、ネイにしか解らない。

そのうちネイはつぶやき始めた。

「親父・・・街の人・・・自分」「親父の正体」「街の人たちの存在」
数時間、いろいろとつぶやいていた。

そして、朝日が見えてきた。

ネイの左頬を朝日が照らす、それに勇気付けられたようにネイは立ち上がり、朝日へと向く。

「そうさ。」

親父さえいなくなれば

街の人もあんな事されていたのを許してくれるはずだ」
そう言つてネイは朝日に背を向けた。

少しずつ昇る太陽の日を背中に受けながら、ネイも
少しずつ歩き続ける。

当てがあるのだろうか。ただひたすらに西へと歩き続ける。
ただ、ひたすらに・・・

草花の生えていた地面は、
涸^かれた大地に変わつていた。

ここまで歩き続けたネイは一瞬、蜃気楼のような村の姿を目にした。
見つけたと同時に、ネイは疲れが一気に来たようで、その場に倒れ
こんだ。

ドサッ

一回だけ響いたネイの倒れこむ音。

ネイは城で過ごしていた日々を走馬灯のように思い出した。
こんなところに居る原因の、昨日の夜の事も。

その走馬灯に浸っていると、後ろから何か聞こえた。

それは、鉄のようなものが地面とこすれる音。

ザクッ ザクッ ザクッ

その音はネイの近くで止まる。

とたんにネイの体が浮き上がった。

ネイは薄れていく意識の中、さつきまで倒れこんでいた地面
さっきの音の正体、それにまたがる人を見た。

く出会く

(あれは夢か)

気がついたネイは、何よりも先にそのことを考えた。

でも、ネイに向けられた声で、夢じゃなかったと・・・そう思った。

「っあ、気がついた」

声のほうに顔を向ける。

「なんともないみたいだね」

涙が涸^かれたような目をしたネイは、そこにいる少女の姿を見た。

「それにしてもびっくりしたよ、ここに来る途中に人が倒れてい
るんだもん」

ネイはやつと自分の今置かれている状態を把握した。

そう、倒れて近づいてきた音の正体は馬、その馬に乗った少女に助
けられた。

そして、蜃気楼のように見えた村、

この村の宿屋二階まで運んでもらった。

クリスのベットから見える窓の外は、
丸屋根の建物が5、6個見えている。

だが、人の姿など無かった。

「君は？」

いろいろと聞きたい事もあったが、それが先に出てきた質問だった。

「私はササキラ＝シエンリー、サキって呼んでね」

「シエンリー」

「そう、シエンリー。」

ササキラ＝シエンリーだよ

「シエンリー」

それは、国を捨てたものが付ける名前
大概が国に滅亡したものが、旅に出る者が付ける名前である。

シエンリーを聞いたネイは、少し考え

「ネグリス」シエンリー、クリスで良いよ」

「へえ、クリスもシエンリーなんだね。私と同じ旅人？」

首を振るか迷ったが、無造作に首を縦に振るクリス。

「なんか、詳しい事情があるみたいだね」

今度は迷わず縦に振ったクリス。

「やっぱり、言えないんだよね・・・」

サキの質問に困りつつも、クリスは小さく縦に振る。

それからしばらく、サキとクリスは話しをする。

最後にクリスの質問

「あのさ、一緒に行かせてもらえなかな？」

サキは「待ってました」のような表情で、

「うん。私一人だから一緒に行こう」

その言葉にクリスはホッとして答える。

「ありがとう」

そして、クリスはまた横になった。

サキもクリスの隣のベットで横になる。

次の日の朝、快く出て行けなかったとも知らずに・・・

（使者）

その日の夜

クリスはまだ疲れが残っていたのか、まだ寝ていた。けど、サキは起きていた。

それからサキは階段を降り、外に出て、夜の散歩を楽しんでいる。そのように見える。

昼とは違った、月夜の晩。

人の気配が無く、静まり返っていた。

サキは独り言を言う。

「クリスか、私と同じシェンリー、あのとき、躊躇^{ためら}ってたのは、

私と同じ、国に滅亡したからなのかな？」

やはり、クリスのことを思っていた。

一人旅で寂しいのか、一人で居ると不安になるのか、どちらなのか解らないが、仲間ができて嬉しそだった。だから、クリスの心配をしていたのだ・・・

数分間歩いて、ほど良き眠りが来た時に

サキは宿屋に向かった。

それを追うように、後ろから近づいてくる、金属と金属のこすれる音。

カシヤ カシヤ カシヤ

それは、イスダンプルクの使いだった。人数は3人、硬い金属に包まれた身体^{からだ}

腰には剣。頑丈そつだ。

3人はクリスの居る宿屋へと向かっていく。
そして、金属に包まれた腕を上げ、宿屋の入り口に、
手を掛ける。

ギイイ カシヤ カシヤ カシヤ

使いの歩く音が一階に響きわたる。

まだ、眠りが浅かったサキは、目を開ける。
聞いたことのある金属音に、冷や汗が走る。

「この音はまさか・・・」

サキはこのまま様子を見て戦うか、

クリスを連れて逃げ出すか、考えていた。

だが、サキに答えを出さないかのように、
金属音は近づいてくる。

少しずつ、すこしずつ

不安から逃れるように、サキはベットから降りて、
音を立てないように、少しずつ扉に近づく。
そして、ついに

ギイイ

脱出

複数の金属音だけが響く部屋。

次の瞬間、部屋だけじゃなく宿屋全体に大きな音と振動が走る。

宿屋の主人も最初から居なかったようだ。

その他の宿泊者も最初から居なかったように、誰も起きずに静まり返っていた。

まるで、この部屋だけに時間が流れているように……

この村に居るのがクリスとサキ、使いの3人だけのように……

音の正体、それは

サキが、3人の使いを蹴り飛ばし、

鎧同士がぶつかり合う轟音だった。

使いはベットを通り過ぎ、窓際に吹き飛び、

重なり合い、もがき始めた。

使いがもがいている間に、サキは

クリスの体を持って、使いが来た道を逆戻りして、月が照らす外に出た。

停めておいた馬にクリスを乗せ走り出す。

「やっぱり、クリスは普通の旅人じゃなく、

国から逃げてきたんだ。

それも、私達には想像もつかない理由で」

クリスがほんの前まで寝ていた部屋では

暗闇で何が起こったのか解らずにいる使いがいる。

まだもがいている使いがいる。

鎧が重くて立ち上がれない使いがいる。

やっと立ち上がった頃、その部屋は、
クリスが居ない。
散乱したベット。
割れ目の入った床。
そして、真つ暗な空間。
それだけだった。

3人は、どこに行ったか解らないクリスを追うより、
城に引き返したほうが良いと考えたのだろうか、
クリス達とは反対の方向へと歩いていく。

馬の蹄つひが地面を蹴る音、
部屋に近づいていた金属音、
その二つは次第に遠ざかっていく。
間に誰も居なくなつた村を残して。

旅立

「お腹空いた」

夜の時間、逃げ出した事を知らないクリスが、目を開けたと同時に出了たクリスの一声。

周りの景色が動いている事、

バランスを崩して落ちそうになる、

この異変に気づいたのはだいぶ後だった。

「っあ、おはよう」

サキの声で今が朝だという事に気づいた。

「あれ？ サキ、どうしたの？」

「なんでもないよ、ただ、早く出発したかっただけ」

「ふーん」

クリスは落ちそうになったりして、

とりあえず、馬に跨またがった。

そして、落ちないようにサキのお腹に手を回して、しっかりと握り締める。

サキは、恥ずかしそうに微笑みつつ

「そういえばさ、クリスは何歳なの？」

（あの兵達のこととは黙っているべきだよね）」

クリスは、自分と同じくらいだと思っていたから、

初めて会った時には聞かなかつたのだ。

「あ、僕は・・・15」

「とりあえず私の方が年上か、

私は17か18」

「17か18!？」

「だって、あまりそういうの気にしないから、大体でしか覚えてなくて」

「ふーん」

こんな会話をしながら、次の村が見えてくるのを待った。その途中で見つけたもの、それは、

これより先

看板・・・

「これより先」からは折れていて、解らないが、これを通り過ぎたら、次に戻ってくる時、それは親父を倒すただけに戻ってくる。その後、どうするかは解らないが、親父を目的として、クリスは、

旅出 りぼしゅち

夜風を体に浴びながら、
新ためて決意をかためる。

く支度く

馬に乗って走る事、数時間経ち、朝日が後ろで昇っている。

馬は、さすがに疲れはて、歩いてきた。

「ねえクリス、ここからはちょっと歩こうか」
クリスは同意して、すぐさま馬から降りた。

「お疲れ様」

そう言つて、サキも馬から降りる。

そして、この先に見えている森まで歩いた。

けど、気がつけば丸一日、飯を食べていなかった。森の手前の村まで、とりあえず歩く。

たった1kmが地獄のようだった。

照りつける太陽、地面から出る熱い蒸気、

そして、空腹

さっきの村とはだいぶ違う村

木で作られた建物がいたるところにあり、人もたくさんいて、にぎわっている。

村へ着くなり、馬を適当な場所へ止め、

食事所へと行き、注文する。

サキがお金を払ってくれて、

「早速、行きますか」

クリスはこれから始まる旅にウズウズしていた。

この時ばかりは、あの夜の事を忘れていた。

「その前に、ちゃんと旅支度しないと」

そう言つて、サキは武器屋へと向かった。
クリスもサキに付いて行く。

ずらりと飾られている武器の数々。

片手剣、太刀、大剣、槍、

この他にも色々、この武器屋に飾られている。

「主人さん、何かいい武器は無い？」

サキは武器屋の主人に言う。

「ん？ 誰が使うんだい？ お前さんかい？」

サキは後ろにいるクリスを向きながら言う。

「違います、使うのはこの子です」

クリスを見ながら主人は、

「へえ、その子がねえ。

なるほどねえ

んじゃ、あのフォールションがいいな」

そう言つて主人は指差した。

その先にあつたのは、

刀身の長さ、50cm弱

取っ手の長さ、15cm前後

刃幅、15cm前後

の、片手剣だつた。

「はい、クリス」

サキは指の先にあつた剣を取つてクリスに手渡す。

「重・・・」

手にずっしりと来る重量。

「それが、今の世の中で一番頼りになる武器だ。

ほとんど斬るつて言うより重さで叩くつて感じで、

刃幅が広いから守るにも役立つ」

クリスはフォールションを持ちながら主人の話を聞く。軽く振り回してみると、「重さで叩く」の意味が解った。

「なるほど・・・」

クリスはずぶやいた。

サキはお金を払って、クリスと一緒に店を出る。

「ありがとうございます」

武器屋の主人の声が聞こえた。

その後、食料等も買って、

馬の元へ向かった。

歩きながらクリスは、

「あれ？ サキはいらないの？ それと鎧とかは？」

サキは歩きながら、

「私はもう持つてるから大丈夫。」

それに鎧つけたら馬が疲れるし、

武器屋の主人が重さで叩くって言うってたから、

馬に乗ったままやれば大丈夫でしょ」

クリスは納得した。

数分後、馬に乗ったクリスとサキは森へと向かった。

そこは、迷うが当然の森とも知らずに・・・

く支度く（後書き）

ここに出てきた「フォールシヨン」は
俗に言う「ファルシオン」です。
知ってる人もいます。

く 森歩 く

鬱蒼うっそうと茂る樹々。

光が届かせないほどの、高く育った樹。

左右には海まで生える樹々。

入り口と言えるだけのポツカリ開いた隙間。

そして、この森だけが夜だった。

こう言うのを、

「迷いの森」

そう呼ぶのだろう。

一度入ったら二度と出られない雰囲気を漂わしていた。

森の入り口手前でいったん止まる。

「高・・・」

クリスは見上げる。

「暗・・・」

正面を向いたクリス。

サキは沈黙中。

クリスも沈黙していた。

ようやく沈黙が解除され、口を開いたサキは、

「と、とりあえず行こっか・・・」

そう言っつて馬を歩かせる。

踏み入れた先は闇。

遠ざかっていく光。

聳そびえ立つ樹々。

サキは踏み入れたときに何かの違和感を感じた。

（あれ？　なんでこの森の樹、

こんなにまで育っているんだろう？）

サキの違和感の正体は何だったのだろうか・・・

後ろの光が見えなくなったところ、

足元が解る位の光が差し込んだ。

それでもまだ危険があった。

ただ、クリスは危険なんてどうでもよかった。

それは

「暗き場所での恐怖」

それがクリスの脳裏に流れた。

冷や汗が走り、体が震えた。

そして、無意識の内にサキをつかんでいる手、

それを　強く　握り締めた。

「どうしたの？　クリス」

クリスの異変に気がついたサキ。

クリスは強く握り締めてた手を緩めて、

「あ、なんでもない」

だんだん小さくなつていく声で言った。

「なんか怖いものでも見たの？」

だが、クリスは何も答えない。

だから、サキも何も言わなかった。

この暗闇はしばらく続きそうだった。

それ故、クリスの恐怖も止む事は無く、

サキの心配も止む事は無かった。

く焚火く

「結構歩いたね」

馬に乗って、沈黙を解いたクリスの一言。
歩きながらと言って

何時間歩いたかは解らない。

そして、今は昼なのか夜なのかも、
時間の感覚が無くなってくる。

「ん 疲れたの？ それじゃ1回休む？」

「そうだね。それじゃあ、休めるいい場所があったらやすもつか」
「そうしよつか」

でも、その一言に合ういい場所というのが見つからない。

あまりいい場所とは言えないが、
日の入っている場所を見つけた。

「ここにしよう」

探すのに時間が掛かり、疲れ果てたクリスが言った。

「そうしよつか」

サキは馬を止め、クリスとサキは馬から降りた。

「お疲れさま」

馬に向かって言うサキの言葉。

その場所にテントを張って、サキは

「私はこの周辺探索しているから、

クリスはこの中に入っている道具で

火でも熾おこしてて」

そう言って袋をクリスに手渡す。

「うん、わかった。サキも気をつけてね」

そしてサキは森へと消えていく。

サキの後姿がすぐ見えなくなった。
そしてクリスは一人になった。
また、あの恐怖が頭をよぎった。
それを避けるべく、すぐに火を熾す準備をした。
サキに渡されたバツクの中身を取り出してみた。
入っていたのは・・・
薬瓶、水瓶、食料多数、その他に旅に必要なもの。
だが、サキの持ち物のようなものも有った。
それは・・・
黒い粉、着火器具、着火器具付きの手袋、
白い札数枚、黒い粉の付いた白い札数枚。

「なんだろう？」
クリスはサキの持ち物らしきものを見つめていた。
「この黒い粉、いったいなんだろう？」
クリスは少しだけの黒い粉を目の前に持ってきて調べてみた。
触った感触はザラザラ。
ちよつと舐めてみたら食べ物ではないようだ。
息を吹きかけると飛び散った。
「さっぱり解らん」
そう言つてクリスは飛び散った黒い粉をはたいて、
黒い粉を下に置いて、次に着火器具を調べた。
叩くより、擦り合わせて火花を起す道具らしい。
擦っていたら、火花が、置いてといた黒い粉に落ちた。

火花が黒い粉に落ちた瞬間
勢い良く炎が出た。
クリスは吃驚してその場を離れた。
炎は少しずつ小さくなり、やがて消えた。

「なんだっただらる・・・」

クリスはもう一度、黒い粉に火花を落とした。
炎がまた上がった。そして、消えた。

「すごいな・・・この粉・・・」

サキが戻ったら聞いてみよう」

そう言つてクリスは木を集め

それを一箇所に集めて

黒い粉を振り掛けて、火花を落とした。

そして、焚き火ができた。

そして、クリスは眠った。

その後ろから聞こえる、人が歩く音。

その音はクリスに近づいていく・・・

～炎語～

「あ、寝ちゃったんだ・・・」

起きたらそこには、火に枝を入れているサキの姿があった。

「良く寝られるね・・・」

クリスが起きたときにサキが言った。

「あ、サキ

帰ってたんだ・・・お帰り」

「ありがとう」

そして、クリスは半分寝ぼけ状態から回復して、

「なにか、収穫はあった？」

サキはクリスに白い粒を見せながら言う。

「この森に入ったときに疑問に思ったんだけどね、

この森の樹、光が入らないのに

すごく高く育っているじゃない。

それで、樹を細かく調べてみたら

樹にこの小さい粒がたくさん付いてたの」

この粒はいつたい何なのだろう。

話を聞く限りは、この粒が光の役割を果たしているように聞こえる。

「へえ、こんな粒がねえ」

クリスはとりあえず感心していた。

そしてサキとクリスはお腹に食べ物を入れる。

馬も落ちている草を食べている。

火を見ているうちに

クリスはサキに聞きたい事を思い出した。

「そういえばさ、

サキに聞きたいんだけど、バツクに入っていた

あの黒い粉っていつたい何？」

サキは驚く。

「あ、知っちゃったんだ。

あの粉 えんじん 炎塵の事」

「エン・・・ジン？」

クリスはサキの言った言葉を繰り返して言った。

「そう、炎塵

この粉は私の武器、そして私にしか作れない粉なの」

「なんで？」

「詳しくは、あまり話したくないから

手短に話すね」

クリスはサキの話をしつかりと聞く

「この粉は、粉末状のものなら何でもいい、

それに、私が持っている油をかけて

良くなじませて、乾かせば完成する」

「油？」

「それはクリスにも言えない。

そして、乾かした粉に着火器具で火花を落とせば・・・」

「ふーん」

サキはいつもと違う表情で話していた。

だから、クリスもこれ以上話さなかった。

こうしている内に、日の入っていた場所が

暗くなった。そしてサキとクリスは火を消して

テントに入った。

そして夜が過ぎていく。

く炎語く（後書き）

炎塵は私のオリジナルです。
なので、詳しいことは考えていません。

く 森起 く

テント内で目覚めた二人。

でも、テントの外はいつまでも変わらずに真っ暗のまま。

「おはよう？ クリス」

そう言つてサキはテントの外に出る。

暗い中、かすかな光を頼りに、馬の元へと向かった。

「今日も一日よろしくね」

そう言いながら、馬を撫でるサキ。

クリスもテントから出てきた。

火を熾^{おこ}して、サキと一緒に

テントをたたみ始める。

片付いたところで、火を消して、

馬に乗つてまた歩いた。

こういう暗い森の中では

時間の感覚が失われていきそうだった。

でも、そんな事をいちいち気にしてる暇も無く。

馬に乗つて歩くだけだった。

だが、今日は昨日の森とは何かが違った。

馬の歩く音だけしか聞こえなかつた森に

新たな音が聞こえていたのだ。

それは、樹の上を走っている音だった。

それも、一つじゃなく複数の音が聞こえる。

その音はだんだん大きくなっていき、

次の瞬間、聞こえた音。

<バキツ>

「うわー」

聞こえた音と声、

馬に乗っていたサキの頭に枝が落ちてきた。

「なんだろう?」

サキは落ちてきた枝を見つめ、クリスが上を見た瞬間

<ドンツ>

と、鈍い音が聞こえた。

そして、クリスは馬から落ちていた。

馬を挟んで反対側にはもう一人倒れていた。

サキは馬から降りて、

「大丈夫!？」

と、クリスに近づく。

クリスは気絶していた、

でも、落ちてきたもう一人は

気がついていた。

「あいたたた・・・」

それは、サキよりも年の若そうな少女だった

サキがその少女を見て、声を掛けようとしたとき、

さきほど歩いてきた道に誰かが居た。

サキはそっちを向いた。

そこに居たのは、3人であった。

〜初戦〜

当たり所が良かったのか、クリスはすぐに気がついた。その時にクリスが見たものは、暗闇の中に見える3人は、鎧は着ておらず、動きやすい布が全身に巻かれている、そいつらをサキは見る
馬を挟んで見える知らない少女

「何？ あいつら」

「っあ、クリス気がついた」

サキはクリスを見て安心した。

クリスは3人方を見ている。

「ナンダ キサマラ ジャマヲスルキカ」

暗き森で聞こえた声。

「この人たちは関係ないもん」

少女が言う。

「クリス、どうする？」

サキはクリスに言う。

「関係ないって言っても、

この時点で関わりあってるから、見過ごせない」

クリスは親父によって苦しめられた街の人たちを思い出したのか、苦しめられる人を見過ごさないと決めたのか、どちらにしても、助けると言う気はあった。

「助けてほしい？」

サキは少女に向かって言う。

「出来れば助けてほしい」

それを聞いたクリスが言う。

「と、言うわけです」

サキが続けて、

「やりますか」

その後の森は少し荒れる。

クリスはフォールションを持って構え、

サキはバツクから手袋を取り出して右手にはめて、

左手で札を取り出した。

「行くよ！ クリス」

「うん」

敵さんも腕に巻いてあった布から大爪を出す。

そして、激突した。

クリスは切りかかってきた一人を

フォールションで抑える。

サキは森を飛び回って残りの2人を相手している。

サキは飛び回りつつ、敵さんの背中に何かを貼っている。

それは、炎塵をつけた札だった。

しかし、二度も貼り付けているようだった。

二度貼り付けた敵さんに、右手の手袋をこすり合わせ、

火花を背中に落とす。

発火力の強いサキ特製の炎塵

それは、少しの火花でも発火する。

札に火花を落とされた敵さんは、札が燃え上がる。

だが次の瞬間、札が爆発した。

爆発によって吹き飛ばされた敵さん

一回の爆発で気を失った。

サキはもう一人も同じやり方で吹き飛ばした。

クリスのほうは力負けしそうになっていた。

ついに力負けして、敵の爪が首元をかすった。

クリスは後ろに倒れこみ首を触る。

血が出ていた・・・

やっぱり、クリスには戦いが無理なのだろうか・・・

〜爆終〜

吹き飛ばされたクリス、
首より垂れ流れてくる血、
闇より迫り来る敵。

クリスは負けな**い**と思って、フォールションを構える。
そして、再び切りかかってくる敵

さつきと同じ金属音が鳴り響く
力を入れたために血の出が強くなった

（このままじゃ また 吹き飛ばされる）

そう思ったクリスが見たものは、

敵を2人倒して、クリスが今戦っている敵の後ろにいるサキだった。

（サキはもう倒したのか・・・

すごいな・・・

負けられないな・・・）

そう思っ**て**クリスは大爪を押し返す。

そうしている内に、サキはまた札を2枚取り出して
敵の背中に貼り付ける。

そして、右手の指をこすり合わせ火花を起こした。

爆発

敵は吹き飛ばされ

クリスに覆おおいかぶさり、吹き飛んだ。

クリスも一緒に吹き飛んだ。

「大丈夫？」

吹き飛んだクリスに向かってサキが言った。

クリスは上に乗っている敵をどかして立ちながら、

「なんとか大丈夫、

それより、何したの？」

サキはクリスに近づいて

「もう一つの私の武器で爆発を起こしたただだよ」

そう言いつてサキは微笑んだ。

クリスもつられて微笑んだ。

その二人に、

「あのう・・・」

横から声がした。

クリスとサキは横を向いた。

「あの ええと

ありがとうございます」

そう言ったのは、

上から落ちてきた少女だった。

暗い闇昏あんちゆうの中で出会った少女は

疲れていたのか、その場に倒れこんだ。

く落起く

「どうする？ サキ」

倒れた少女について考えていた。

「置いておくわけにもいかないから、

連れて行く？」

「そうしよう」

早くも解決して、

サキは倒れた少女を馬の背中に乗せる。

「それじゃ、行こっか」

クリスが言った。

「ちよつと待つてね、やる事あるでしょ」

クリスが歩き出したのを、サキが止める。

「やる事？」

サキは少女が落ちないのを確認して、クリスに近づいた。

そして、バックに手を伸ばし、薬瓶を取り出した。

そして、薬瓶の中身をクリスの首に塗る。

「痛」

クリスは後ろに下がる。

「ほら動かない。

いくら浅いと言っても、力入れて

血がすごい出てるよ」

「・・・もう」

そして、薬を塗り終えて、

「完了」

「・・・ありがと・・・」

「どういたしまして」

クリスは変な気分になりながらも、

サキと馬に乗った少女と歩き始めた。

そのときのサキはうれしそうに見えた。

しばらくまた歩いた。

そうしていると、後ろから何か聞こえた。

<ドサツ>

「ドサツ？」

クリスとサキは口をそろえて言った。

そして後ろを見ると・・・

馬に乗せていた少女がいない。

「い、痛いです」

少女が地面に横たわっていた。

「落ちた？」

クリスはつぶやいた。

「大丈夫？」

サキはそう言いながら少女に近づく。

「あ、はい。大丈夫です」

「ごめんね。私が縛ってなかったから」

「殺す気です？」

「そうじゃなくて、縛るのを忘れて

あなたが落ちたから、私のせい」

二人が会話してるのを、クリスは遠くから見ている。

(楽しそうだな)

クリスは寂しそうだった。

クリスは近くに腰を下ろして、

二人の話が終わるのを待った。

の、はずだが。

いつの間にかクリスは眠ってしまった。

〜続森〜

クリスは、夢を見てた。

楽しかった少年時代のこと。

親父のたくまじき姿。

街の人たちの微笑み。

今のクリスには毒と同じようなものだった。

いまじゃ、親父も街の人も記憶も・・・

何もかもが信じたくない事ばかりだからだ。

楽しかった記憶がクリスを見守っていた。

クリスは安心していただけが、記憶が闇へと変わった。

その闇はクリスに近づいてくる。

クリスは逃げに逃げまくる。

しかし、走る事の抵抗もできぬまま

闇はクリスを飲み込んでいく。

クリスは目が覚めた。

額に冷や汗をかいていた。

「大丈夫？」

サキは少女と一緒にクリスを見ている。

「あ ああ」

クリスは夢じゃなかったと悔やんでいる。

「暇さえあれば寝る癖、直したほうがいいよ。

それに、たくさん寝るから悪夢も見なくなるわけだし」

サキはクリスに言った。

（暇さえあれば・・・）

暇にさせてるから寝るだけなんだけど・・・）

クリスは思った。

「フェリと一緒に行く準備したからすぐに行くよ」

サキは馬を連れてきた。

「フェリ？」

クリスは首をかしげた。

「この子の名前」

サキは少女を指差し、クリスを見る。

「フェリー」フォルスです。

さつきはありがとございました」

フェリは首を下げる。

「話は歩きながら言うから行こう」

サキはもう準備万端だった。

クリスは立つだけで準備完了だった。

フェリは馬に乗る。

「それじゃ歩こうか」

サキの声で皆歩き出した。

〜森開〜

一人仲間が加わったせいか、
二人で歩いていたときとは
森に話し声が流れる。

でも、話しているのは
サキとフェリだけの声だった。

後ろに聞こえる、馬に乗ったフェリと
馬を引いて歩いているサキの話を
物寂しそうに聞いているだけだった。
でも、クリスは寂しいのか分からない。
サキは楽しそうだった。

「クリスも一緒に話そうよ」
そう言ってきたのはサキだった。

「遠慮しとく」
クリスは話に混ざってよいのか分からず、断った。
だが、馬を引きながら走るサキに
肩を捕まれた。

「そんな事言わないで」
サキが誘う。

「いいの？」
振り向きながら、クリスが答える。
「いいですよ」
フェリも誘う。

いつの間にかクリスは、
どこか距離を置いて話をしていた。

「なんで、あんな奴に追われてたんだ」

クリスはその三人組が気になっていた。

「乙女の過去話は聞かないものです」

フェリがそう答えた。

クリスはその答えに思わずズッコケそうになった。

「私も聞いてみたんだけど答えてくれなくて」

サキがクリスに言う。

「まあ、言いたい事の二つや三つあるものだし

気にしないで行こう」

そう話をしているうちに光が見えてきた。

話をしていて気がつかなかったが、

周りの樹々の高さが低くなっていた。

そこに見えたのは、樹で造られた城と、

同じ樹で造られた家がいくつもあった。

「なんで・・・です？」

そう言っつてフェリは馬から降りて、

来た道に戻ってしまった。

く捕人く

また森へと消えるフェリ。
フェリを追うクリスとサキ

フェリは樹々を飛び去り、クリスとサキは馬でフェリを追う。
「なんで逃げるんだよ」

サキの後ろでクリスが叫ぶ。

「追わないんです。来ないんです」

飛びつつフェリは言い

「逃がさないよ」

サキが言った。

しかし、樹を走るフェリ、地を走る馬は追いつけない。
でも、光が入るこの森で、サキはフェリを見逃さなかった。

しかし、サキの視界からフェリの姿が消えた。

サキは馬に走るのをやめさせた。

「フェリは？」

クリスがサキに聞く

「それが消えちゃったの」

「早いね」

サキはフェリが消えたところに馬を歩かせる。

「いた……」

サキは、地面に倒れているフェリを見つけた。

「落ちたのか……」

クリスはあきれて言った。

フェリは気絶しているらしく、全然動かなかった。

あっけなく捕まったフェリを、

クリスとサキは逃げられぬように、紐で縛り上げた。

「これでよし」

そして、来た道を戻りだし、また同じ建物を見つけた。樹で造られた城と周辺にある家を・・・

「それにしても、疲れた・・・」

クリスは疲れ果てて言った。

「とりあえず、休もつか」

やっと森を出られ、休むために宿屋を探した。

探している途中で兵士を見つけた。

「っな」

兵士は、縛り上げられ、馬に乗せられているフェリを見つけたとたんに、城へと走り去った。

「なんだろう？」

それを見たサキは嫌な予感がした。

クリスは疑問に思っているだけだった。

数分後、大量の兵士達がクリス達に向かって走ってきた。

兵士はクリス達の周りを囲み、一斉に突っ込んできた。

幸い武器を所持していない兵士だったが、

なすすべも無くクリス達は捕まってしまった。

そして、城に連れてかれ、牢獄に入れられた。

「何が起きた？」

クリスとサキは同じことを考えた。

く牢内く

一筋の光が入る牢獄、クリスとサキは一緒の部屋に入れられた。牢獄と言っても、この牢獄は樹で造られていた。しかし、牢獄だけあって、すごい丈夫だった。

「なんでここにいろの？」

クリスは冷たい牢獄の中で、当たり前のことを言った。

「過ぎた事を思っても意味が無いよ。」

それより出る方法を考えよう」

サキがクリスに言った。

「脱獄・・・(さりりとすごいこと言った・・・)

出来るの？」

クリスは啞然としつつ答えた。

「武器も取られたし、今考えてる」

サキは考えても無いように言った。

(ホントに出られるのだろうか・・・)

まあ、俺も考えよう・・・)

クリスは牢獄の中を見渡した。

4 m四方の床

高さ4 mくらいにある吹き抜け

「やっぱりあそこからか・・・」

そう言つて、クリスは吹き抜けの壁を登り始めた。

しかし、樹で造られた牢獄と言つても、凹凸が無い。

古くからあるのか、壁には隙間が出来ている程度だった

クリスはわずかな隙間に手を引っ掛けて登る。

何度も滑り落ちるクリス

まだ、諦めてはいない

クリスを見守るサキ

そして、クリスはまた落ちた。

窓からの光も暗くなり、牢獄に寒さがやってきた。

クリスは手も痛くなって諦めようとしたとき、

サキが後ろから抱き付いてきた。

「・・・」

クリスは言葉を出せなかった。

抱きついたサキはクリスの耳元で

「頑張って」

と言ってきた。

サキはそういって、クリスから離れた。

クリスはまた頑張って登ろうとした。

しかし、登ろうとしたときに、

牢獄の扉が開いた。

く 牢出く

「釈放だ」

そう言われて、牢から出るクリスとサキ。

「早いね、釈放するの・・・」

サキは、クリスに小さな声で言った。

「そ、そうだね」

クリスは考え事をしているときに言われ、慌てながら答えた。

クリスは

（サキのあれ・・・なんだったんだろう）

クリスは、サキに抱きつかれた事を考えていた。

クリスは考えているうちに、兵士に

「座れ、王様が参る」

そう言われて、クリスとサキは座った。

数分後に王様と・・・フェリが歩いて来て席に座った。

「この度は我が娘、フェリを連れてきてくれたことに感謝する」

王様だけあり、凜とした態度だった。

王様のとなりに居るフェリは俯うつむいている。

クリスとサキは何がどうということなのか分からないでいる。

何も分からぬままその部屋から連れてかれた。

外に出たときにはもう夜になっていた。

「とりあえず寝よっか」

「うん」

そうして、宿屋に泊まった。

こここの部屋も樹で造られている。

でも、硬過ぎず柔らか過ぎずの感触だった。

サキが寝ようとする、クリスが

「あのさ、フェリのことどう思う？」

サキは間を置いて

「フェリはこの国の姫様だったとしか考えられないよね……」

「うん……。でも何で森であんな奴らに追われてたんだろう」

クリスは寝返りを打ちながら

「でも、話してくれないから分からないね……」

「分からないものは分からない。だからもうこの話は終わり」

「それともう一つ」

サキは少し驚いて

「他にもあるの？」

「うん……。牢に入れられてるとき、何で抱きついてきたの？」

しかし、サキからの返事は無かった。

サキは……狸寝入りをしていた……

それを知らないクリスは、サキは寝たと思ひ込み、寝てしまった。

夜もだいぶ過ぎ、闇がやってきた。

クリス達の部屋に近づき、そして

コンコン

音を抑えた、扉を叩く音

何度かやってるうちに、クリスが起きた。

〈暗計〉

クリスは起きて扉を開けた。

そこにいたのは、人影だった。暗くてよく見えない。

「クリスです？」

人影がしゃべった。

聞いた事ある声にクリスは

「フェリ？」

「ちよつと話したい事あるから来ててくださいです？」

クリスは返事をする前に、手首を引つ張られた。

クリスは引つ張られるまま外に出て、人に見つからぬように森へと入って行った。

人影は月明かりに照らされ、布を纏まとっていた。

布を取った人影、それはまさしくフェリの姿だった。

「フェリ、どうしたの？」

クリスはフェリに言った。フェリは

「こんな時間じゃないと城を抜け出せません」

クリス達に言いたいことがあるんです」

「こつちも色々聞きたいことがあるんだけど」

クリスが言ったら、フェリは昼と同じ口調で答えた。

「乙女の過去話は聞かないものです」

「答えてくれ・・・」

クリスはため息をつき、肩を落とした。

そんなクリスを見無視してフェリは

「私の城を抜け出す計画を手伝ってくださいです」

クリスは肩を戻し

「なんで？」

フェリは躊躇ためらいつつも

「姫という立場がいやで、城を抜け出したいです。でも、城を抜け出そうとしてもすぐに捕まるです。そこで、クリス達の力を貸してほしいのです。」

クリスは、自分は王子というくだらない立場を捨ててきた。だから、フェリが城を抜け出したいと思っても止めようとは思わなかった。

「わかった。」

フェリは嬉しそうに

「ありがとうございます。」

クリスは何をしたらいいのか、フェリに聞いた。フェリは……

く計画く

フェリの計画、それは・・・

十回目の朝、フェリが城を抜け出して、クリス達が王様に、「私達がやります」と言って、フェリを追う

こんな、簡単でばれやすそうな計画だった。

この計画を聞いたクリスは

「で、できるの？」

フェリは何でも知っているように

「できますです。」

今日みたいに、朝私は抜け出せましたし、

クリス達のことは信じてくれますです」

クリスは

「なんで？」

フェリが答える

「クリス達が捕まったのは、私を人質にして

何かをするのだと勘違いし、私が訳を話して

やっと出してくれたので、お父さんはきつと

クリス達のことを信じてくれますです」

(フェリを縛っていたのが、捕まった理由だったんだ・・・)

クリスは、自分達が捕まった理由を理解し、肩を落とした。

「王様が俺達を捕まえた理由が、それだったか・・・」

フェリは心配そうに

「協力してくれますです？」

クリスは立ち直って

「わかった、協力してやる」

フェリは嬉しそうに

「ありがとうございます」

では、十日後の朝、よろしくです。

あつ、それと連れ戻すのが遅いと、

勘付かれるので、早く移動しますよ」

「最後にいいか？」

「なんです？」

「なんで、城を出たい

姫という立場が嫌？ それだけじゃないはずだ」

そう言つてクリスは、宿屋にもどつた。

その隣では、クリス達が牢屋に入れられる

原因を作つたサキが隣で寝ている。

（十日後か・・・）

〜朝話〜

朝

何も知らないサキが隣で寝ている。
何も知らずに寝息を立てている。

(サキにだけは普通、言うよな……)

クリスはサキを起こした。

「早いね、クリス」

「色々考えてたらいつの間にか……」

(本当はフェリの話が終わったとき

すでに日が昇ってて、寝るのが面倒なだけだったけど……)

話したい事があるんだ」

サキは眠い目をこすりつつ

クリスはサキのほかの人に聞こえないように小声で

「フェリが、この国を出て行くってさ」

サキは驚いて

「なっ、なんで!?!」

クリスはサキの口を押さえて

「声がでかい」

サキは静かになって

「ご、ごめん。でも、どうやって?」

「なんでも、九回目の朝出て行くから、それを手伝えってくれて」

「どんな風に?」

「フェリが出て行ったら、王様がフェリを追えってことになる。

そこで俺達が、フェリを追うと言う

追わせてもらえて、そのまま出て行く

「これがフェリの計画」

サキは、昨晚のクリスと同じように

「ばれないの？」

同じ事を聞いた。

「昨日、捕まったでしょ。なんでも、サキがフェリを逃がさぬように縛っていたのが悪かったみたい」

「私のせいなんだ……」

「だから、王様は俺達を信じてくれるってわけ」

サキは向きを変えて、膝を抱え考えている

(捕まった事が自分のせいだと気づいて、悲しいのかな)

クリスは、膝を抱えるサキを、そんな目で見ていた。

しかし、サキの考えてる事は違った。

「わたしは認めない！」

その声にクリスは驚いた。

「な、何が」

「ここを出て行くことがよ」

クリスは驚きつつ

「なんで認めないの」

サキは訴えるように

「出て行く事すなわ即ち、国を捨てることだからよ」

「そんなの俺に言われても」

サキは正気を戻して

「ご、ごめんなさい」

「とりあえず、九回目の朝まで、普通に過すごそう」

サキは頷うなずいた

〜鍛始〜

各々（と、言っても二人だけだが……）

九回目の朝が来るまで、それぞれに別れて過ごした。

クリスの過ごし方

クリスはサキより先に部屋を出て、外を歩いた。

建物が見えるその先には360度の見渡す限りの樹々
その中心に位置する大きな建物。

城と言うより、大きめに作った樹の家という感じだ。

「小さいな……」

クリスはその小ささに、この牢屋に捕まっていた事を思い出した。

（そう言えば、聞き逃した……）

クリスは、サキに抱きつかれた事を思い出し

片手で口を押さえ、赤くなった。

そんな時、後ろから

「よう、青年。涙流してどうしたんだ？」

元気な声で、クリスに話しかけたのは

筋肉質の体の人だった。

（涙流している？）

その男が言ったことに、クリスは疑問に思った

きつとこの男は、口を押さえ、赤くなっていることを
泣いていると勘違いしてしまったのだろうか

「いや、別に泣いてたわけは……」

しかし、男はそんな事を聞きもせず

「言い訳はよしな。余計悲しくなるぜ

それと、着いて来な」

クリスの話を聞きもせず、クリスを連れて行った
クリスが色々と言ってるにも係わらずに……

そして、クリスの連れてかれた先は

「鍛神」

「たんしん？」

森に近い場所にある、古ぼけた建物の入り口上においてある看板

「そうだ、ここは私の道場だ」

道場と聞いたとたんにクリスは

「ボロボロじゃん・・・」

その言葉は聞こえたのだろうか、男は

「今にでかくしてやるさ」

男はそう言って、クリスを中心に連れて行った。

中は、外見どおりにボロンボロンだった。

「えっと……」

何をするの？　ここで……」

男は

「何って、お前を鍛えてやるのさ。」

涙流すやつは、心から弱いからな」

(だから、泣いてたわけじゃないんだって……)

そして、男から無理やり鍛えられる……

(続く)

道洗

他の建物と同じ樹で作られた道場

色々と生えている壁、滑りやすそうな床、崩れてきそうな天井
そして、頼りない主

しかし見渡してみると、ボロボロなのに穴は開いていなかった。

道場を見渡したクリスが言った。

「ボロボロと言うより、掃除とかしてないって感じだな。」

まあ、ボロボロの所は変わらないけど」

それを聞いた男は

「そりゃそうさ。2年くらい前に最後の一人が出て行って、

それ以来、手入れも何もしていないからな」

と言って、男は笑い声を上げた。

（そこ、笑って済ませることなのか……

それ以前にここは道場でいいのか……）

笑って言い事なのかクリスは悩み落ち込んで、

落ち込んでいるところを見られたクリスは

「落ち込んでいる暇があったら掃除をせい。」

鍛錬生は掃除に始まり掃除に終わる

「これがこの道場の決まりだ」

そう言っつて男はバケツと雑巾を用意した

クリスは考えた

このまま帰っても男に呼び止められ、自分の話を聞いてもらえない
から

結局は掃除をやらされるはめになるだろうと思いい、渋々、掃除を始
めた。

不慣れな手つきだったが

道場自体はそれほどでかくなかったので、
丁寧の手抜きをして、道場を拭き終えた。
とりあえずは、綺麗になった道場があった

掃除を終わらせたクリスは

このまま帰るのも考えたが、やっぱり無理という結論が出て
男に終わったことを言った。

男が言うには

次は剣術の修行だそうだ・・・

く只管く

クリスはふと思った

(この男、なんて言うんだ?)

しかし、クリスの話を聞かない男に対して

「名前なんて言うんですか?」

などと聞いても答えてくれるはずが無い

かと言って、なんて呼べばいいか分からないクリス

(名前聞くのが、もう面倒だ。言われるがままにしよう)

こんな結論をクリスは出した。

そして、剣術の修行が始まる。

「武器は壁に飾られているのを使え

オレを倒せば免許皆伝だ」

男がそう言ってきた

クリスは言われるがまま、壁にある数多くの武器から
今、自分が使っているのと同じ形のを手に取った。

(面倒だ。早く終わらせよう)

男は何も持たずに仁王立ちでいる

クリスは男に切りかかった。

次の瞬間、クリスは吹き飛ばされていた

(なんだ、いまのは)

クリスは今、吹き飛ばされたことを冷静に思い出した

切りかかったクリスは男に武器を素手ではじかれ殴り飛ばされた。

「くそつ、もう一度だ」

クリスは立ち上がって、また切りかかった。
そして吹き飛ばされた。

「なんで飛ばされるんだよ」

もう一度、同じ事の繰り返し

「何でだ」

「またか」

「弾くな、男」

「弾かれるな、オレ」

同じ事の繰り返し

疲れを見せない男

疲れるクリス

「弱い、弱い弱い弱い弱い弱い！」

男が言った

クリスは考えた

何がいけないかを

同じ事の繰り返しの理由を

ただ黙り込んで

息を切らせながら

そのうち、クリスの息を切らせる音が消え
クリスは立ち上がり武器のある壁に歩いた。

そして選んだものは
軽く薄い刃の付いた長剣の樹だった

クリスの出したのは

「速さ」

これだった

そして、男の前に立った

〜終練〜

クリスの出した答えが

「速さ」

だがしかし、男を倒せるのだろうか・・・

男の前に立ったクリス

手には長くうすい刃の樹

(倒す)

クリスの考えてる事はこれだけだった

そして、男に勢い良く突っ込んで切りかかった

男はクリスの剣の速さがいきなり変わって、対応が遅れ
肩に一撃をくらった

(よし)

クリスの一撃はこれで終わらなかった

さらに二撃目、三撃目と切りかかる

さっきまで、重いものを持ってたため、普通より早い

四撃目、五撃目、男はだたくらうだけだった

六撃目、七撃目、八撃目、九撃目、十撃目

休む暇も無いクリスの猛攻

クリスは我武者羅に切りかかる

クリスの方が疲れているが、クリスはそんなことは気にせず

男を倒す事だけを考えた

男はよける事も出来ず、耐えるだけ

しかし、クリスの猛攻に耐えられるはずもなかった

そして、男は倒れた

クリスの速さについていけずに

男が倒れたのをみたら、クリスも倒れた

「う、合格だ」

男はそう言った

クリスは疲れはてて、聞こえるはずもない

クリスが目覚めた

そして、すぐさま道場を出て行った

このときに、クリスは自分に似合っている武器を見つけた

早速、武器の調達に出かけた

その頃、道場内にいる男は

「なんだ、あの速さは・・・」

このままいけばあいつ、化けるかもな

それにしても・・・

あいつの名前なんて言うんだ？」

道場に倒れている男の独り言が聞こえる

く粉造く

サキの過ごし方

クリスが出て行った後、部屋にはサキだけが残っている

「私は認めない」

クリスと別れる前に言った台詞

この言葉にどんな意味があったのだろうか

それはサキにしか分からない

サキは考えてるのか、思い出してるのかわからないが

そのまま眠ってしまったらしい

足を抱えた状態で寝ている

しばらく経って

「ほら、あんた。もう昼なんだから起きな、ほら」

その声にサキは起きた

声の正体は宿屋の主人だった

主人は部屋を片付けるために来たのだが

サキが寝ていたために起こしたようだ

サキは荷物をもって外に出た

「何してようかな……」

歩きながらサキはつぶやく

「天気もいいし、炎塵でもつくろう」

サキはそう言っ、森が近く、人目につかない場所に行っ

荷物から液体と炎塵を取り出した

森から両手いっぱい樹を持って来て

それを一箇所に集めて火をおこした
さらにまた森から樹をたくさん持って来て
火が強くなる

サキはその間座っているだけだった
誰にも気づかれずに、一人でやっている

火が消え、炭と灰になった火の跡

触れるくらいになった炭をサキは手に持った
そして、手に持った炭を……

粉々にし始めた

素手でできるものだろうか……
瞬く間に炭は粉に変わった

次にサキは液体を粉にした炭に少しかけた
そして、乾かし始めた

「完成」

サキはそう言うと瓶に粉を入れ始めた
焚き火の跡などを消して、サキは歩いた

〜開始〜(前書き)

都合によりサキの話はカットしました・・・
では、お楽しみください

〜開始〜

二人は別々に別れて、十日間を過ごした。

クリスは一回りたくましくなり、

背中には鍛心で使った樹の形と同じ太刀を背負っている

サキは……どう過ごしていたのだろうか。

そして、約束の十回目の朝

フェリがもうすでに脱出したのか、いつもより、村がざわついてい
る。

クリスは宿屋の窓から外の見渡して様子を伺っている。

しかし、クリスの隣にはサキの姿は無い。

「私は認めない」

この言葉にどんな意味が込められていたのか、

クリスは国が騒ぐという計画の第一段階が始まるまでそのことにつ
いて考えていた。

何に対して言った言葉なのかを……深く考えた。

「どういう意味なんだよ……」

フェリがこの国を出たい。それを言ったとたん、サキがそう言っ
た。

きっと、フェリと国。なにか関係があるんだろうな」

そうしてるうちに、クリスは寝てしまった。

「おい、急げ〜、探せ〜」

そんな声がクリスの耳に届いてきた。

「始まったか。フェリの計画が」

そして、クリスは外に出た

（サキはどうすっかな）

まあ、大丈夫だろ）

そしてクリスは何食わぬ顔で兵士らしき格好のものに近づいた。

「どうしたんですか？ こんなに騒がしいですが」

兵士はかまってる暇も無いようで、クリスの質問に答ええない
そして、急ぎ足で去っていく

「しかたない、無理矢理追うか」

そして、フェリの計画通りに、フェリを追うクリス
遠くからサキが見ていることも知らずに……

く開始く(後書き)

ふと思う・・・
寝るの多いな・・・

〜騒動〜

サキがクリスを見ていることも知らずに、クリスは森へと消えて行った。

「何するかだけは確認しないと」

サキはクリスのことが心配らしく、だからクリスを見張っていた。

「クリスが行っちゃったし、追うか追わぬかどうしよう・・・
それにしても・・・騒がしいな・・・」

サキはそのことについて考えてた。

そして、兵士が走り回っていることをうるさく思えた。

「クリスをこのまま追うのも、あれから話してないし
かといって、このまま別れるのもな」

サキの悩みはまだまだ続く

そうしてるうちに何かと忙しそうに飛び回っている兵士が話しが聞えた

「おい、知ってるか？」

王女様が消えたことを

「だから俺たちはこうやって飛び回ってるんだろ」

(フェリが・・・消えた?)

サキが聞いたのは、フェリが消えたことだった。フェリが消えたとなると、さすがに騒がしくなった理由が分かった

(まさか、クリスの言ってたのはこれのこと?)

不意にクリスの言った事を思い出した。

さらに兵士の話を聞いていると

「王様もなにかと心配なさってるし、

王女様と一緒にいたら殺されかねないな」

「殺される前に、見つけたって報告すれば問題無いだろ」

サキに不安がよぎる

クリスが殺されそうになるかもしれないことに

(殺される!?)

クリスはフェリを追ったとすると・・・

一緒にいるところを見られたら・・・

やばいかも・・・)

そして、サキはクリスを追った。

クリスを見張って、消えていった森へと

〜成功〜

フェリはもうすでに森を走っている。
隙を見つけて城を抜け出したり
抜け出す事を覚^{さと}られないように普通に過^くし
いま、まさに走っている。

「お父さんはこうでもしないと
私を信じてくれないです

とにかく家出です」

そして、止まらずにフェリは走る

そうしてるうちに後ろから聞える声

「おい、フェリー、待て〜」

その声はクリスだった。

フェリは少し速度を落としてクリスと並んだ

「どうなんだ？ 調子は」

クリスが話しかける

「順調です」

そして、速度を上げて走っていく

そして、また後ろから

「待ってよー、クリスー」

今度はサキがやってきた

「ねえ知ってる？

フェリ早く届けないと殺される事」

クリスは

「そんなこと知るか。

僕達はただ逃げればいいだけだよ」

「それよりクリス

武器変わった？」

サキの質問にクリスは答える

「ああ、変わったよ

この薄い軽い長い刀にな」

「そっか、かっこいいね」

「そんなことより、急ぐですよ」

そして、明かりが見えてきた

後ろからは何も来ない

「いまごろ、あっちはどうなってるですかね」

「けっこう兵隊さんとかが忙しそうだったけど」

フェリの質問にサキが答えた。

「それで僕たちが向かってる先は？」

クリスの質問にフェリが答えると同時に森を抜けた

「水の国、ウォリシアスです」

森を抜けた先は、いくつにも交わる水路

その中心に城が建ってるだけだった

く只歩く

水の国「ウオリシアス」

その名の通り、陸地よりも川や湖の面積が広い
そのため、陸地には小船が浮いており、人が渡っている

そこを歩き続けるクリス一行

幅1〜2メートルの陸地を

グニヤグニヤとグルグルと歩き続ける

近づいては離れての繰り返しだった

「全然着かないね・・・」

すぐ目の前に見える城をめざして歩いているが
道が道だけにサキは言葉をもらした

そんなサキに知っているような雰囲気

「だって、普通は小船で行くんですよ」

フェリはサキに言う

「だったら、小船で行こうよ・・・」

ほら、ちょうどそこに小船あるんだし」

クリスは近くの小船を見た

「え、あ・・・それはちよつと嫌です」

フェリはちよつと困ったようにしている

「なんで？」

サキとクリスが同時に聞く

「だってその・・・小船に乗るとクラクラするといっすか
乗っていられなくなるといっすことになるです・・・」

あせりながらフェリは理由を話す

「（それは・・・船酔いだな・・・）」

クリスとサキは同じことを思った

「仕方ない。歩くか」

「そうだね。そうしよう」

この言葉にフェリはホッとしたようだ
そしてまだまだ歩き続ける

どれくらい進んだのだろうか、まだ着かない

「そう言えばさ、あっちはどうなってるんだろっな」

「あっち？」

クリスの発言にフェリとサキが聞いた

「フェリのとこ」

「ああ、確かにね」

「多分ですね・・・まだ探し続けてるですね

ここまで来てるなんて思わないで」

「ふーん、それでいいのかね・・・」

話をしながらまだまだ歩く

そして、やっと着いた

く又歩く

水の国ウォリシアス

その名の通りの水の国

その中心にある城

その入り口にクリス一行は立っている。

歩き疲れた状態で三人はそこにいる。

フェリが小船で行きたく無いから

歩き続けて疲れている。

「やっと付きましたですね」

「やっとだな・・・」

「長かったね・・・」

だいぶ息を切らした三人

フェリは息を整えて入り口から城に入っていく

それについていくクリスとサキ

向こう側が、いつまでも同じ通路を歩いている

「んで、何がしたいんだ」

ここに来た目的をまだ聞いていなかった

サキはただ付いてきただけのような感じなので

理由を聞くつもりはなかったようだ。

「ん〜そうですね・・・」

フェリは歩きながらしばらく考え込んだ。

しばらく沈黙が続いた。

その間、空気が重く感じたクリス

サキは何も感じず、普通に歩いている

そしてやっと、フェリが口を開いた

「理由は特に無いですね」

クリスはその場でこけそうになった。

長い時間、重い空気を感じて出た答えがこれだから
ツッコミもしたくなかった。でも、つつこめない

そして、まだまだ続く通路をしばらく歩いた

今度はサキの口から

「そういえばさ、どこに向かっているの？」

そしてまた、沈黙が続いた

サキは重いを感じず、答えを待っていた

「とりあえず、王様に会いにです」

「普通に会えるもんなのか？」

「ここは、普通に会えます」

「いったいどんな王様なんだろ・・・」

そして、大きな間についた

〜密会〜

大きな間に着いた3人

クリスとサキはどんな王様が想像していた

クリスは、自分の親父とは違って、真面目で国民思いの人
そう、想像していた。

サキは、まあ元気いっぱいな人？
を想像していた。

しかし、3人の前に出てきた王様は

クリスとサキが想像していた人物と根本的に違っていた。
それは、王様らしき服装で出てくるのかと思っていたが
なんと、国民と変わらぬ、動きやすい服装だった。

こんな王様がいていいのだろうか
でも、この方が国民と接しやすく、
また、国民も接しやすいのだろうか

「おお、フェリか。久しぶりだな」

王様は啞然としているクリスとサキを他所に
フェリに話しかけた

「疲れたですよ」

フェリはそう言って王様に抱きついた
こんなことをやっていいのだろうか。

一国の主、王様に抱きつくなんて……
クリスとサキは同じことを考えた

「そうか、疲れたか。」

早く、船酔いを治せばいいのにな」

「もう、ほっといてくださいです」

もはや、親戚親友との会話のようだった。
クリスとサキは、この二人に驚かせられてばかりだった。

「それで、あの二人は？」

王様はやつとなのか、クリスとサキに気がついた

「あの二人は、お供です」

お供……何だろうな……この気持ちは……
言葉だけでも、二人は振り回されていた。

「もうそろそろ……フェリ。」

本題を話してくれないか？」

待ちかねたクリスが言葉を発した。

「うむ、そうだな。話すか」

「そうですね、話しましょう」

二人の言う事に、クリスは……

〱密会〱(後書き)

なんか・・・疲れる・・・

〜談話〜

「単刀直入に言うと、イスダンプルクの国が責めてくるんだ」
「えっ」

王様の言ったことにクリスは動揺した。
インエルダイはクリスの元住んでた国
国を捨て、旅に出たものの、日は浅いために
国への思いはまだ消えてはいなかった。

（何で……親父が……攻めて来る……
何で……なんでだよ……）

しばらくクリスは沈黙していた。

サキはクリスの異常に気づき

「どうしたの？クリス」

その一言にフェリも王様も気がついた

「どうしたんです？クリス」

クリスは額に汗をかきながらも

「いや、なんでもない」

「そうか」

クリスはなんでもないので装い

王様は話を進めた。

「何でも、ごく最近、ここから東の位置にある国、フォトリシア

そこから人が数名、怪我をした状態でやってきたのだ」

その言葉にサキは、ホッとしたような、安心したような

そんな感じがした。

「話を聞いてみると、イスダンプルクから兵隊を連れてた王が

なんの理由があるか分からんが、いきなり攻撃をし

刃向かう間もなく、フォトリシアは崩れ去った」

王様の説明にサキは下を向き、泣いているようだった。

クリスはすぐ、それに気がついた。

「どうした？サキ」

サキは目をこすりながら

「ううん。なんでもない」

「ならいいけど」

王様はさらに話をする

「そして、こちらにも向かってくるらしく

迎撃することにした」

（親父と戦うのか・・・やってやる・・・）

クリスはそう思った。

サキも、何か考えているようだった。

「覚悟」

「夕刻頃に攻めて来るだろう」

王様は、真上で照りつける太陽を見ながら言った。

「となると・・・結構、時間無いですね・・・」

フェリは他人事のような感じで言った。

そんな中でクリスとサキは黙り込んで何かを考えている。

クリスにとって、いつか来るかもしれない親父との戦いである。

（そうさ、ここで倒しちゃうんだ。殺しちゃうんだ。

そうすれば、何もかも元通りだ）

親父を倒す事だけを考えており、後のことなんてどうでもよくなっているクリス。

サキは何かを考えている…のだろうか
さっきからブツブツと言っている。

「……………」

その言葉だけ言うと、いきなり走り出した。

普段の明るいサキとはあきらかに違う。

走っているサキは何にも振り向かず、一心不乱だった。

クリスは、考えながら、親父の軍隊が来る方向。

戦いの戦場となる平地に来ていた。

ここに来るときに通ってきた、川の道は、ここにはなく、

あるのは、北から南に一直線に流れるひとつの川だけである。

「ここで・・・夕刻、戦うのか」

太陽が少し傾く空を見上げた。

「覚悟を・・・決めるか」

そして、改めて平地を見渡すと、川の近くに人影が見えた。よく見てみると、サキの人影だった。

「サキ、何してんの？」

クリスは走りながら近づく。

しかし、サキは何も答ええない。

「どうかしたか？」

それでも、サキは答ええない。

「なるほどな・・・んじゃあな」

そう言ってクリスは城へと戻った。

く戦く

(親父が来る、倒す、殺す)

「攻めて来たぞ」

そのかけ声で、親父の事を考えていたクリスは我に返った。

「来たか・・・」

西の平原の地平線に数多数の軍勢を見渡せる城、

そこから急いで外に出て、刀を抜き、前線へと走った。

クリスに続いて頑丈な甲冑に身を包んだ兵隊が続く。

同じくらいの軍勢。もうすぐ衝突する。

敵を切り捨て、奥にいるクリスの親父、そいつを指してクリスは走っている。

サキは迎え撃つ兵を見送り、ただ一点だけをじっと、見ている。

それは、最前線の敵軍だった。

タイミングを待っていたのだろうか、

サキは、手に装着している着火付きの手袋を弾き、火花を落としたり、落ちた火花は地に落ち、触れた瞬間に炎が敵軍めがけて燃え上がる。敵軍の間に入り込んで、燃える炎。瞬間、今度は大きな爆発が起きた。

この爆発で敵軍の前線隊は吹き飛んだ。

計画通りに行ったのか、サキは不敵な笑みを浮かべた。

「そうさ、あんなやつら、消えちやえばいいんだ」

サキはそうつぶやいた。

すぐ目の前で起きた爆発だが、クリスはただ、走っていた。クリスの目の前の敵も消え、クリスの親父が丸見えだった。クリスはさらにスピードを上げた。

そして、飛びあがり、切りかかった。

クリスの太刀筋は、親父に止められていた。

クリスと親父が一瞬、目を合わせた。

親父はクリスがここにいることなど気にもとめず、クリスを弾き返した。

転がるクリスに

「この程度か。来て損したわい」

親父の声が聞こえた。

く戦く(後書き)

リアル・・・なぞすぎ・・・

クリスが立ち上がると、親父の前に兵士が二人さつきよりも頑丈な鎧を身に纏い、矛先に三日月のついた槍を持ち親父の前に立ち、クリスの前に立ちかはかった。

「邪魔すんじゃねえ」

そう言つてクリスは、二人に切りかかった。

しかし、クリスの刀は、槍に受け止められた。

親父を目指して走ってきたクリスには、

防具を身につけていず、丸裸の体にもう一人の兵士が槍を突き刺す。クリスは刀の柄を下げ、槍を受け止めた。

柄の部分と刃の部分で二人の槍を止めるクリス

兵士は一旦下がって、今度は二人で薙ぎ払いをしてきた。

今のクリスに「引き下がる」という言葉は無いのだろうか、

左右からの薙ぎ払いに合わせて、クリスは前に進んだ。

そして、クリスの体に兵士の槍の柄の部分がぶち当たる。

一度呼吸を整えて、クリスは二つの柄を切り落とした。

兵士は一度下がり、柄を捨て刀を抜いた。

クリスは刀を親父に向けて叫んだ。

「親父、待ってるよ。絶対、殺してやる」

その言葉を聞いた親父は、鼻で笑い、こう言った。

「できるわけ、なかるうが」

「何を言つたつて無駄さ。あんたが死ぬ事に変わりはないんだからな」

そう言い返し、クリスは刀を握り、兵士二人に切りかかった。

二人の兵士は、互いの刀を交差させて、クリスの刀を受け止める
そして、下に受け流した後に刀を上振り上げて、クリスに切りか
かった。

クリスは止まらずに、兵士の刀を避けながら横回転して、兵士を二
人同時に切った。

頑丈そうな鎧には抉り取られたような刀の後が残っている。

「なんじゃ、いまのは」

親父は、クリスが兵士を切るとき、光ったようでした。

兵士はその場に倒れて、動かなくなつた。

クリスは刀を親父に突き立てて

「次は、お前の番だ」

〓一末〓（後書き）

・
・

く負戦く

「次は、お前の番だ」

刀の切っ先を自分の親父に衝きたて、

一步また一步と近づくクリス

微動だにしない親父。鋭い眼光でクリスを射抜いている。

クリスは立ち止まり、にらみ返す。

武器を持つクリスと、武器を持たない親父

どう見てもクリスの有利のはずだ。

しかし、クリスは一步も動かない。

まるで、動けば終わり。それだった。

それでも、クリスは思いつきり飛びかかった。

「甘いわぁー」

勝負は一瞬で終わった。

飛びかかるクリスを……

拳で……

打ち落としたのだ。

クリスは気を失い、気づいたのはもう、

周りの地には動かない兵士達

漂ってくるのは夜風に混じる血の臭い

それと・・・火薬の臭いがする

周りを見渡していると、サキが立っていた。
冷たい、凍てるような視線で……

「サキか……」

クリスは下を向いて言った。

「…負けたんだね…」

クリスは地面を思いつきりたたき続け始めた

「くそつくそつくそつ！！」

いきなり、クリスは頭を抑えはじめた。

「痛つてな、くそつ！！！」

親父に殴られた場所、クリスは自分に腹が立っていた。

しばらく、クリスの怒りの姿を見ていたサキ

サキは慰めるつもりで言ったのだろうか、

それとも、違う意味で言ったのだろうか…

「私もさ……クリスが戦つてた奴アイツに因縁ウラミがあるんだ……」

クリスは首をサキの方に向けて

「親父は……奴アイツだけは俺の手でやってやる。だから、邪魔はするな」

「なら、早い者勝ちだね」

いつの間にか、朝日が射してきた。

く 救護 く

微かに息のある兵士を探しながら、城へと運ぶ民間人
その民間人に運ばれているクリス
サキは付き添いの人のように、運ばれるクリスを
いつもの表情で見守っている

城にたくさんある空き部屋に傷ついた兵士達は運ばれ
クリスも個室の部屋に運ばれた
サキもクリスに付き添っている
ベットで眠るクリスの頭にはこんもりとこぶが出来ている
サキがそのこぶを突付くとクリスの体が一瞬だけ揺れる
突付くたびにクリスの体が揺れる
サキはそれが面白いのか、何度も何回も突付いている
「おーい、生きてる〜」
突付きながらサキはクリスに言ってみる

「まあ、生きてはいるな」
クリスは目を閉じながら答えた
「おお、いつから気がついてたの」
半分驚きながら聞いて見るサキ
「あ〜……多分さつき」
目を閉じたままで話し続けるクリス
「それと、なんでさつきから目を開けないの？」
「それがなく、開けようと思ってても開かないんだよ」
クリスは目を開かない理由をサキに話しだす
「多分、頭殴られたとき、その衝撃で目がどうにかなったのかもし
れない」
「それで、これからどうするの？」

目が見えなくなったクリスにサキが問う

「まあ、目が見えないんじゃないやなくて、目が開かなくなったただけだから自然と治るのを待つさ」

「そっか」

そんな話をしていると、部屋に誰かはいってきて

「君達、気がついたら王様に会いに行くようにだつてよ」

そう、男の人が告げてきた

く打合く

城の道を歩いて王様の下へ歩くクリスとサキ
そして、大広間についた。

広間の真ん中のテーブル

そのところで、何かを見ている王様がいた
クリスとサキが来たことに気づいた王様は
近づきながら言ってくる

「来てくれたか。まあ、いろいろとご苦労様。こっちに来てくれ」
クリスとサキをさっきのテーブルに案内する
その上にあつたのは、一枚の地図だった

「なんで地図を見てたんです」
サキが王様に聞く

「とりあえず、私の話が済んでから質問するように」

「はい、分かりました」

そして、王様は話を進めていく

「一日で戦いが済むなんて思いもしてなかった。

それなのに、負傷者の数はこっちが上回っていると言つのに
嫌な戦いだつたよ。

まあ、これくらいにして本題だが、戦いが終わってからあいつら
は引き返したそつだ。

多分、城に戻ったんだろうね。でも、何しに来たのかは分からぬ
ままだが……」

「質問、いいですか」

話の終わりと感じたのか、サキは質問する

「フェリはどこにいるんです」

思い出したように、王様は話し出す

「フェリは、戦いが始まる前に、帰ってもらったよ。」

あの子にはまだ見せてはいけない世界だからね……説得に何時
間要したか……」

「たしかにそうですね……」

「気まずい雰囲気は漂う」

「他にもいいですか」

「ああ、どうぞ」

「さっき見てた地図は」

「ああ、地図はあいつらの道の確認。そこから行き先の判断さ。」

それで、あいつらは戻ったんだ」

「そうですか」

その間のクリスは、何の話をしているのか分からないみたいな顔を
している

「あのさあ……」

クリスの言葉を聞くサキと王様

「さっきから何の話してるの？」

～悩所～

クリスの言葉に、サキと王様は啞然としていた

それはそうだろう。だって、昨日一昨日に戦っていた奴についての話をしていたのに、

その奴のことがわからないというのだから

「クリス、どうかしたの」

サキが動揺しながら、クリスに聞く

「まあ、自分では普通のつもりだけど」

クリスは素っ気無く返す

「クリス、私たちが今何を話してたか分かるかい」

王様もクリスに問う

「昨日一昨日の戦いについて話してるってことはわかるけど誰について話してるのかは、わかんない」

「そう……」

サキと王様は、ため息混じりに言った

「っと……どこまで覚えてるんだい」

王様は、クリスから色々と聞きだしていく

「えっと、何かに叩かれて、しばらく気を失って、サキに突付かれ起こされた

いまの話は、いまいちわかんなかったし……」

クリスは、考え思い出しながら答えていく

「そうか、わかった」

「サキ、ちょっといいかい」

そう言って、王様はサキと部屋の隅に行った

「クリスは一体どうしたんだい」

王様は、ヒソヒソ声でサキと話し始めた

「さあ、私には全然分かりません」

「まあ、クリスの言っていることから分かる事は、戦っていた相手を忘れた感じだ」

王様は、冷静に推理していく

「それに、なんでも目が開かないとか言っていましたよ」

「大丈夫なのかね・・・クリスは・・・はあ・・・」

王様もサキも、クリスを一目見た後、ため息した

「まあいい、君たちにはこれからやっってもらう事がある」
王様は、新しい話を切り出してきた

く憑走く

「君たち二人にはこれから、あいつらを追うために東に歩いて南東に向かつてもらいたい」

王様はとりあえず、サキにだけそう言った。

サキは王様からの願いを聞き終わると、合わせていた目をそらし、どこか遠くを見始めた。

まるで、西にある城を見つめるように……

「そうですね。ここから西にですか」

サキはつぶやき声でそういった。

「残り少ない兵士を集め総攻撃をしたところで、これ以上の兵士を一瞬で吹き飛ばした君たちには到底戦力が足りない。太刀打ちすらできない。だから、行ってくれるか」

王様は頼みつつけた。

その願いに答えてくれないサキ。

「このとおりだ」

王様が言い終えると部屋は静寂と化した。

その静寂に聞こえるかすかな声。耳を澄ませば

「わかりました」とサキの唇が動いていた。サキの答えは「了解」だった。

「クリス、行くよ」

サキの澄まされた声。その声に反応してクリスが動き出す。

「はい」

さっさと準備を済ませて、サキのあとを追うクリス。

早くも二人は急いでいた。何もない血なまぐさい土の上を、何かに取り憑かれたように走るサキをクリスがついて行く形で

「それで、なんでそんなに急いでんの」

急ぐサキに問いかけるクリス

「別に」

それを呆気なく返すサキ

「というかクリス、目大丈夫なの。それでよく走れるよね」

話を反らすように、今度はサキからクリスに対しての問いかけ

「ん？ うん。まあ話せば長くなることだから詳しくは言わないけど」

普通に返すクリス

「着くまで時間はまだまだかかるだろうから聞かせて」

そして、まだまだ走りつづけるクリスとサキ

〜因話〜

大地は戦場のあった場所から、少し荒れた大地へと切り替わった
その荒野を歩く二つの姿、クリスとサキ

サキはスタスタと先に行ってしまう

クリスはおぼつかない足取り

少しの段差でこけそうになったりして

その度に、先に行くサキに待ってもらったりしていた

最初は「けがはしてない?」、次は「大丈夫なの?」

最終的には「何回目?」の心配する声

クリスは軽く笑って返すだけだった

「それで、目の方はどうなの」

ようやく本題に入った

立ち止まるサキに追いついて、軽く息を整えるクリス

「どこから話そうか」

「んー」。最初から

クリスは段差に座って、サキも隣に座った

「自分自身、何がどう起こったのか分からないんだけど」

長々と話し始めるクリス

「ベットで寝てる時にポーっとしてたら、何か変な感覚になって、
気づいたらサキが突っついてた」

「変な感覚?」

サキはクリスを見る。クリスは下を見る

「それは自分でもわかんない。それに、なぜかは知らないけど鼻や
耳、触れる感覚が異常なまでに鋭くなってるんだ」

「それもなんでか分からないの?」

「うん」

そう言っつてクリスは立ち上がった

「それでも、突っついてるのがサキだとわかった、サキがどんな話してたかわかる、感覚で歩ける、今歩いている場所も臭いや感覚でわかる。それだけ」

「それって、結構凄いことだよね」

「まあね」

そう言っつて、クリスは歩き出す

サキも立ち上がり、クリスの横を歩く

く思出す

しばらく荒野を歩くと、クリスとサキは立ち止まった

二人の目線の先にはまだ少し燃えているところがある、元がなんだつたのかが分からない建物があった

「すごい、臭いだな……ここずっと燃えているような臭いだ……何なんだろう、ここ」

異様な臭いを感じたクリス

「いつもはね……ここ、いい感じの匂いが漂ってるんだよ」

サキは、まだ黒煙が立ち上る建物を見ながら言った

「“浄化の火”って言って、ここでは有名みたいなんだ」

下を向きながら話すサキ

「へー、結構物知りなんだね」

サキの方を見るクリス

「そりゃあ……ね」

何かを言いたそうなことを、クリスは悟ったようだった

「そうなんだ……」

そして、燃え尽きた建物を探索し始めた

「まだ燃えてた割には、結構冷めてるね」

クリスが残骸の上を歩きながら言った

サキは何かを手に取り見つめていた

「何してるの、サキ」

何を見てるかは分からないクリス

サキは手に取った額のようなものを胸に抱いた

そして、数粒の涙がサキの目から流れた

クリスはいろいろと掘っていった、まわりにいるんなものが飛び散った

サキはその飛んでくるものを見つめ、さらに涙が出てきた

「ねえクリス」

涙を拭い、クリスを呼ぶ

「何」

掘るのを止めて、穴から出てきたクリス

顔や手は煤で真っ黒だった

「私の昔話、聞く？」

そう言ってきたサキ

「まあ、サキのこと知らないから話してくれらなら聞くけど」

「そう」

そして、ゆっくりと話し始めるサキ

昔話

少し昔の物語

あるところに、とても栄えた城がありました

国ではありません、城です

その城の名前は、「ファイング・ネス」

一人の城王、一人の女王、一人の姫

そして、たくさんの城民たみがいます

城民たちはその大きな大きな城に全員が住んでいます

争いごとは起こりません

なぜかというと、炎があるからです

浄化の炎「フリング」

その炎は身を清め、正のエネルギーを増やし

負のエネルギーを燃やします

なので、城民はいつまでも健康で元気一杯です

争う事などは決してありません

そんな、ある日のことでした

いつものように城で生活をしている城民

それを護る外壁が、安泰が、何者かによって崩されました

崩れゆく外壁の隙間から多人数はそれを目にしました

距離が離れているにもかかわらずに見える、拳大の大砲を

そこにいる、たくさんの兵士とともに

その城は加工を中心としたやり方でここまで発展してきた

だから、隣接する国に加工品を売り飛ばした

しかし、この城に住んでるひとの誰もがあんな大砲を見たことはなかった

あんなものが作れるのかさえ分からなかったのです

なので、なす術なく城は崩れ落ち

息あるわずかな城民は去っていく後姿を

時折見せる悪魔のような横顔を決して忘れないと刻みました

姫は悲しみに憑かれていました

両親である国王と女王

兄弟のようなたくさん国民

その、残酷な残骸を

姫は身分を変え、容姿を変えて

復讐する事を誓いました

今もまだ、その姫は戦っています

く火蓋く

サキは語るのを止めた。そして顔を上げる、前を向く。未来を見つめているようだ。

「それで、その少女は今どこにいるの」

タイミングを見計らって問いかける。サキを見ながら。

そんなサキを見ながら、話を聞きながら今までの自分を振り返ってたクリス。

「んゝ…まだ執筆中、未完結ということにしときましようか」

サキが笑ってそう答える。

「早く書き終わらそうか」

クリスもつられて笑顔がこぼれた。

風にのる二人の笑い声。

城に燃える最後の残り火が、その風によってフワリと消えた。

「それじゃ、行くか」

クリスは立ち上がりサキの元に歩く。手をかす。

「うん、そうだね」

サキは額を置いてその場で立つ、歩き出す。クリスの右手が寂しく震える。

クリスはその手をしまつて、サキについて歩く。

二人の後ろで一つの風が吹いた。

その先に待つ道のり。

平坦な道、茨の道、そんなものは関係無かった。

どんな道であろうと、道であることに変わりはない。

道は道、いままで歩んできた道も道。いろんなものを道しるべとして置いてきた。

この先には道しるべなど無い。それでも歩くしかない。

絶望に陥っても、覚悟を決め、歩く。そうすればちゃんとした道が

用意される。
未来が待っている。

歩みを止めるクリスとサキ。

「久しぶりだ」

城を見上げてクリスが言う。

「私は二回目だね。この城見るのは」
サキも言う

「それじゃあ、行こう」

クリスとサキは戦闘態勢にはいる。

〜衝突〜

「そういえばさ…ねえクリス」

いざ入ろうと目立たぬ色で作られた扉を開けようとしていたクリスにサキが聞いてきた

「何？」

手をかけたままで後ろを向くクリス

「武器は？刀は？どうしたの？」

ハツとしたような、ノー？と首をかしげるクリス

「そういえば、武器がないや…」

頭を元に戻して辺りを見渡す

「ああいいや、なんとかなるだろ」

そう言つて扉を押し開ける

鈍い金属音と冷たい空気

クリスは一息入れて中に入る

「なんなんだろ…」

クリスのことを心配しつつ、一緒に城の中へ入るサキ

城内の空気は一層と冷たかった

吐き出す息が白くなっている

「寒いね…。それに別な寒気もする」

サキが口に手を当てながらクリスに言う

「別に。なんとも心地よくて、しっくりくる感じの冷たさだけど」

いつもと変わらずに歩くクリス

右や左に緩やかな曲線を描いて壁に当たっている

「そうじゃなくて、何も無いのが不気味なの」

サキが白い息を吐きながら言う

「たとえば？」

クリスが壁スレスレでこちらを向いた

「兵士がすくなくすぎるし、何よりこの冷たい空気」

「別にラッキーだったって思えば良いだけなんじゃない」
そう言ってるうちに扉が見えてきた

クリスは一度扉にぶつかった。だいぶ音が響いた

その場にしゃがんで鼻を抑えるクリス
でもすぐに立ち上がった

「大丈夫？」

サキが聞く

「うん」

そう言って、扉を引いた
中には…そう…あの男がいたのだ

〜記憶〜

あの男は部屋の中心の玉座に座っている

回りには複数の兵士

男はクリス達に気づき、こちらを向く

「そこから入ってくるとは、つまらん奴じゃな」

そう言ってきた

「それにしても、ずいぶん手薄ね。ここまで来るのが楽だったわ」

サキが大きな声で言う

「あたりまえだな。そこは非常通路」

貶す

「え」

驚くサキ

「別に、兵士なんぞいらんからな」

「そうなんだ」

サキは悔しそうだった

「クリスも何か言ってるやろうよ」

クリスに任せようとするサキ

反応のないクリス

「クリス？」

クリスを気にかけるサキ

そしていきなり

クリスは声にならない叫びを上げた

その声は部屋いっぱいに響きわたった

「ど、どうしたの？ クリス」

いきなりの事に少々間をあけてからクリスに近づくと

「なるほどな、そういうことな」

クリスはそう言ってくる

「やっとだ。やっと全てを思い出した」

記憶が戻ったのか、良く見ると目も開いている

「どうなったの？ クリス」

サキは何もわからないでいる

「さあね。でも、やるべきことは分かるよな」

クリスがまとめた

その言葉にサキも全てを理解した

「そうだね」

「ふっはっはっは…」

玉座に座る男が急に笑い出した

「何がおかしい」

クリスはむかついた

「その言葉、いつまでもつかない」

苦笑しながら続けて言う

「あの時の続きだ」

そう言っただけを放り投げた

クリスの足元に滑り込んできたのはひとつの刀

そう、クリスの刀だった

「これで、何をしようってんだ」

刀を拾い上げて、男に向かって言う

「無論、続き」

男はそう言っただけで玉座より立ち上がる

〜最後〜

鞘から刀を抜くクリス

長い刀身が鈍くかがやく

大きな体をした親父が前に立ちはだかる

その場には不穏な空気が流れ込む

「ッハ」

クリスは空気を叫び散らした

そして飛びかかる、切りかかる

「ぬるい」

「…っな」

切りかかったはずのクリスのからだは止まっている

親父の手には刀が握られて、クリスの攻撃を止めていたのだ

「つくそ」

クリスは刀を動かす

ビクともしない…

「ぬっははっは」

不敵なる笑い、クリスの目の前で異様に動く

そして金属音とともに刀が折られた

バランスをすぐしたクリスに拳が飛んできた

反応できずにクリスは殴り飛ばされる

床に転がるクリス

目を開けると何かが飛んでくる

折れた刃の部分が床に突き刺さった

クリスは体を転がして避ける

故に折れた刀、折れた刃を持ちながらクリスは立ち上がる

両手に持たれている刀は、折れても十分な長さだった

「二回目は…そうはいかねえぜ…」

そしてまた飛び掛る

止められぬように素早く切り裂く

刀が親父の体を切った

これを逃さず、クリスは連続で切りかかる

親父の体が徐々に切り傷と血で染まっていく

急所にはあたらずとも相当なダメージだろう

その場に親父は倒れこんだ

「終わったの？」

傍観していたサキが聞く

「さすがに…殺せないからな…死なない程度にやっ」といた

折れた刃を捨てて、サキに近寄るクリス

「そっか」

「さてと、助けるか」

そう言ってクリスは部屋という部屋を探索した

〜危機〜

鎖で封じられていた扉を見つけた

クリスは扉に耳を当てる

「…ここか」

そう言つて鎖を引きちぎろうとする

「…無理か」

鎖はビクともしない。ただ音を響かせるだけだった

「…サキ、頼む」

「え？ どうするの？」

「扉を破壊してくれればいい」

「了解」

サキは扉の前に立ち、壁との隙間に何かをすり込み例の粉をつける

「避難しててね〜」

「もうしてる」

クリスがそういうと、サキは火花を落とし爆発を起こした

鎖はふき飛び、壁は焦げ、扉は内側に倒れた

そしたら声が増えた

「…なにここ…」

第一にサキが部屋の中を見回した

ボロボロの人々が大量に押し寄せてきた

サキとクリスの横を通り過ぎて行った

誰も居なくなつた部屋にはとても大きな何かがあった

クリスとサキは部屋の中に入り、その大きな何かを調べた

「…あ」

サキは気づいた

その大きな何かについていた丸く長い筒を

見覚えがあるものだった

「これって…まさか」

サキが恐る恐る触れる

「お前が城を襲われた時に見たのはこれだろうな」

「…なんで」

サキは崩れ落ちた

「なんでだろうな」

二人以外の声が響いた

クリスとサキは大きなものの奥に居る人

血だらけだったがしっかりと立っていた

手にはまた、小さな筒の付いたもの

「…動くなよ。ワシがこの引き金を引けばお前たちは終わりだ」

そう言つて、筒をこちら側に向ける

「そんな傷でほざくなよ」

クリスはそのまま、傷だらけの男に近づく

すると、部屋に音が響いた

音の終わりとともにクリスはその場に倒れた

肩をおさえている。床には血が広がっていた

「キサマ、なんだそれは」

肩をおさえながら叫んだ

「コイツは最近手に入れた異国のものさ」

「なんでそんなものを…」

「この大陸を、私が統一するためだよ。そのために武器を手に入れ、国民に作らせていたのさ。私が王として君臨するためにな」

「やっかいなもんを手に入れやがって」

クリスは立ち上がった

く危機く（後書き）

いつ終わるんだろ・・・

〜END〜

クリスは立ち上がったもどろする事もできなかった

武器もなく、体はボロボロ

同じボロボロの体で両手に異国の武器を持つ男

サキは泣いていた

その声が部屋には響いていた

「サキ！」

クリスが叫んだ

その言葉にサキは驚いて、涙が飛んだ

「な、何」

そう言つて立ち上がった

「そこから支援してくれ」

「あ…う、うん」

すぐさまサキは何かを取り出した

「それじゃあ、いくよ」

「ああ」

サキは何かをクリスと男の間に投げ込んだ

床に落ちて数秒後、それが爆発した

そのチャンスをクリスは逃さなかった

黒煙の中に飛び込んで、体当たりをかまそうとした

「バカめが」

男は黒煙の中に数発、音を鳴らした

クリスが黒煙から出てきた

頬をかすり、腹にまで血が出ていた

それでもクリスは突っ込み、男を押し倒し

左手に握られていた武器を奪い、右腕を足で踏みつけ奪った武器を突きつけた

「さて、どうしてほしい」

クリスは息を整えながらそう言った

「殺したいならころせ。それができるのならな」

「へー」

クリスは男の喉元に武器を当て

そして…

一つの音が部屋に響き渡った

サキが覗くと

喉から血を垂れ流す男と、その上に立つクリスの姿があった

サキは近づいた

クリスの顔を覗くと、涙を流していた

「なんで？」

サキは聞いていた

「いままでをぶつけてやった。それだけだ」

そしてクリスは腹を押さえて後ろに倒れこんだ

「どうする」

「このままにしといてくれ」

そう言つてクリスは目を閉じた

サキは微笑んで、クリスの後ろ首をつかんで引きずった

ある程度引いて、サキもクリスと寄り添って寝た

サキが目を覚ました時には海が見えた

崖だった

「起きたか」

クリスが言つ

「あ、生きてた」

「死んでたまるか」

サキは笑つて、そして海を見た

「綺麗だね」

朝日に照らされる海

「ここは、俺が決意した場所なんだ。この日を見て
クリスが語る

「そして、それが終わった」

クリスの横顔が笑っていた

「それで、これからどうするの」

「さあな、なんとでもするさ」

クリスは立ち上がってサキを見る

「一緒に来てくれるか」

「もちろん」

サキも立ち上がって、二人は歩き出した

…どこまでも…いつまでも…

～END～
(後書き)

やっと終わった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0989c/>

大闇子闇

2010年10月11日02時13分発行